僕がお母さんとこんなことになっちゃう話

序章

灰司

前回までのあらすじ

とあるマンションのお隣同士さんだった
〈仲谷家〉と〈加山家〉
ある日〈加山望〉は隣のお母さん〈仲谷美喜〉が
浮気してると勘違いし自らも肉体関係を迫る。
それから二人は欲望のままにお互いの体を求め
行為はエスカレートしていった。
しかしその関係はあっさりと終わってしまう
美喜の息子＜将暉＞が二人の関係を知り
それをネタに自分も母親と肉体関係を迫り
更に望との関係も禁止したかだ。

行き場を失った望の性欲は、、、

仲谷家　　加山家

夫　まさき 将暉　みき 美喜　のぼる 望　なほ 菜穂　夫

序章

僕が隣のお母さん(美喜さん)とセックスするのが
当たり前の関係になって来た頃

僕との関係は唐突に終わった

美喜さんが息子のマサ君に迫られて
セックスするようになって
僕との関係を止めさせたからだ。

嫉妬や悔しさよりもあまりに驚きすぎて
僕はあっさり引き下がってしまった、、

息子と母親がセックスするなんて、、
考えたこともなかった、、
けど、、

それって
僕がお母さんとエッチするって、、、
そんなことって？

そんな目でお母さんを見たことなかったけど
改めてよく観察してみた、、、

はい
いってらっしゃーい
ん？
なにか付いてる？
おかえりー
醤油はここにー、
あれー？
コレはみりんでー、

望、あんた
入るんでしょ？

、、、うん、、、

温かいうちに
早く入っっちゃい
なさい

夜　望は自室のベッドに包まって夢中でオナニーにふけった

アリだ！全然アリだ！
アリどころか最高だよ！

なんで今まで気付かなかったんだろう!?
当たり前だけど自分の母親をエッチの対象になんて思わない、
思っちゃいけないから、、、
でも！

女性を経験するまでは分からなかったけど
今はもう＜母親＞としてじゃなく
＜理想の女（ひと）＞としか見れない

一番近くに最高の相手がいるなんて
おかしくなっちゃうよ！

したい！
お母さんとセックスしたい！

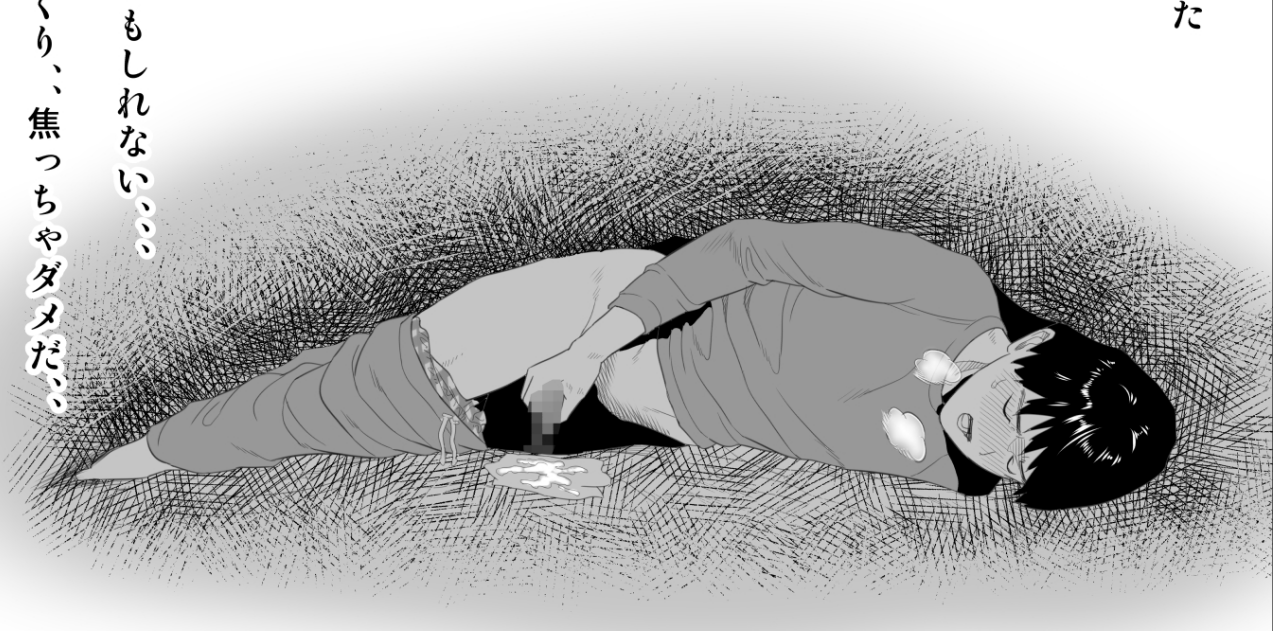
隣のマサ君だって母親としてるんだ！僕だって！

隣のお母さんといっぱいセックスして
色々経験は積んでるんだきっと出来るはず！

でも、うまくやらないと
最悪家族としてもいられなくなるかもしれない、、、

じっくり、、焦っちゃダメだ、、

よーく考えて、、、、、、、



数日後

遂に望はその計画を実行する

夕食後　父親はいつも通り先に風呂から上がってリビングで
テレビを観ながらビールを飲んでいた
母はシャワーを浴びている

このタイミングだ！
望は今までにない程の緊張と興奮を感じながら
ゆっくりと脱衣所に向かう

スリガラスドア越しに母親の裸体がぼんやりと見える
望の股間はスウェット越しでもハッキリ分かるほど勃起していた

思い切って声をかける

「お母さん　ちょっといい？」

「え？　望？　どうしたの？」

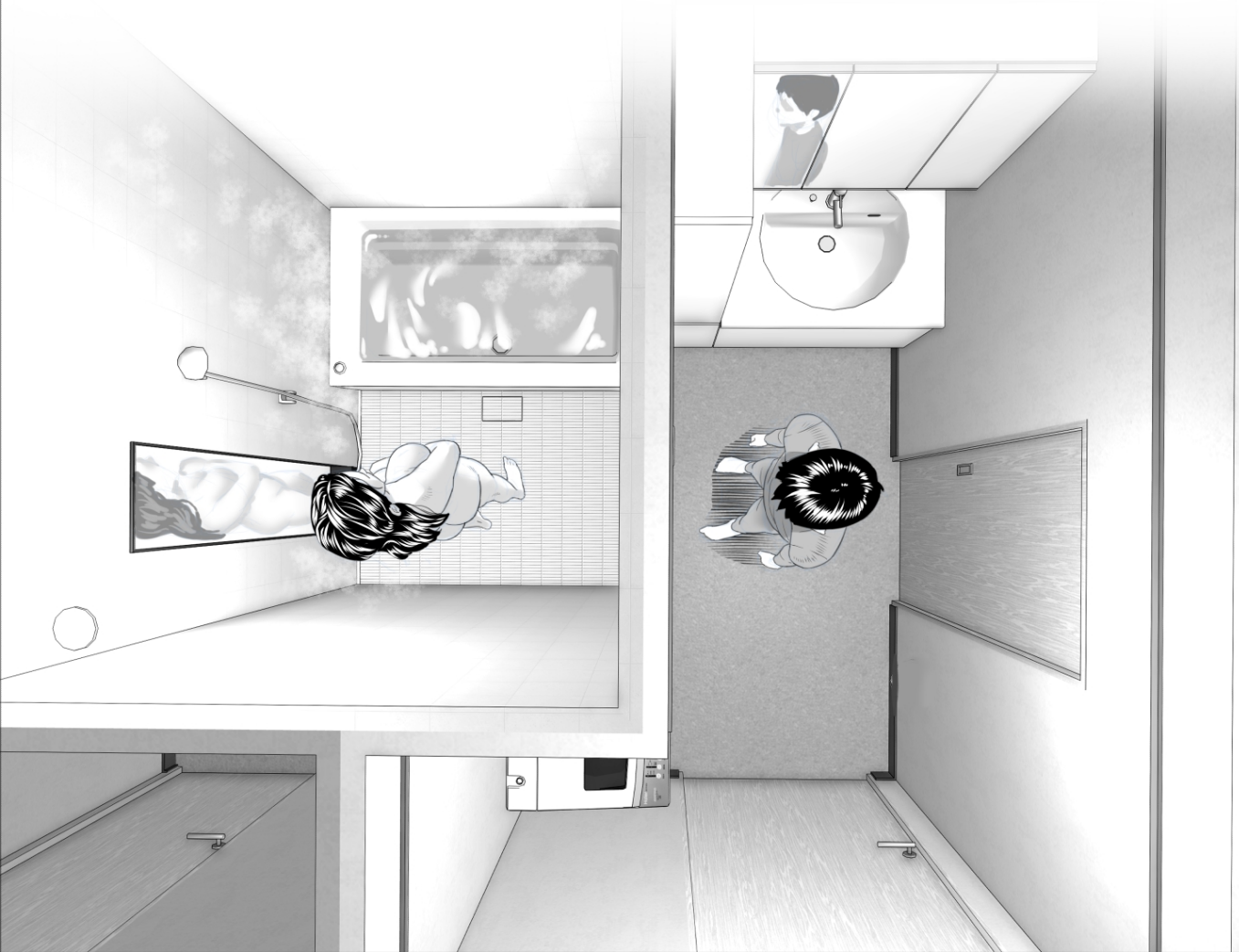
「いや、ちょっと、聞きたいことがあって」

「今じゃなきゃだめなの～」

そう　今！　このタイミングしかない！

「、、、お父さんとは　セックスしてるの？」

「な！
あんた何を聞くのよ　そんなこと!?」
「実はね、、、
僕してるんだ　セックス」
「え？望　彼女いたの？」
「んーー彼女じゃない、、
　実は不倫なんだ」
「え？嘘でしょ!?あんた何してるの!?」
「実は隣のお母さんとなんだよね、、
　僕から誘っちゃったんだけど」
「悪いとは思ってるんだけど
セックスが気持ちよくてやめられないんだ、、
どうしよう、、」
「あんた、、、」
母親の動揺がドア越しに伝わってくる
「だから浮気やめたいから、、、」
そのドアに手をかけて



チャ
!!
お母さん僕とセックスしてくれない？

な！
何言ってるの!?

僕
結構女の人
楽しませることも
出来るんだよ？

ね お願い

パン

やめなさい！

あんた何言ってるか
わかってるの!?

今のは聞かなかった
ことにするから！

あんたも忘れなさい！

ビリビリと痛む頬を抑えながら母親に背を向けて望は言う
「じゃあ　不倫も止めないから」
「まちなさ！、、」
母親の言葉を遮るように望は風呂を去った

絶望のようにシャワーの音が降り注いでいる
膝から崩れ落ちた母親は
その流れを成すすべなく　ただ受け続けていた

自分の部屋に戻った望はぶたれた頬を抑えながら
何故か笑いをこらえていた
母親のことを笑っているのではなく
自分の体のことだ

あれだけ強く拒否されてぶたれたりもしたのに
さっきよりも更に股間がガチガチになってることに
我ながら笑ってしまった

今見たばかりの母親の躰を思い出して
更に興奮してきた

お母さんの躰　最高だ！
胸もお尻も美喜さんより大きくてムチムチで堪らないよ！
どんな感触なんだろう？
どんな揉み心地なんだろう？
どんな味なんだろう？
どんな声で喘ぐんだろう？
どんな揺れ方？　振りかた？

あ～～～～ダメだ　したい！
絶対セックスしたい!!

あの言い方でお母さんのってくるかな？
考えた中では一番＜効く＞と思うんだけど、、、
どうだろ、、、
　どーうなんだろうー、、、！

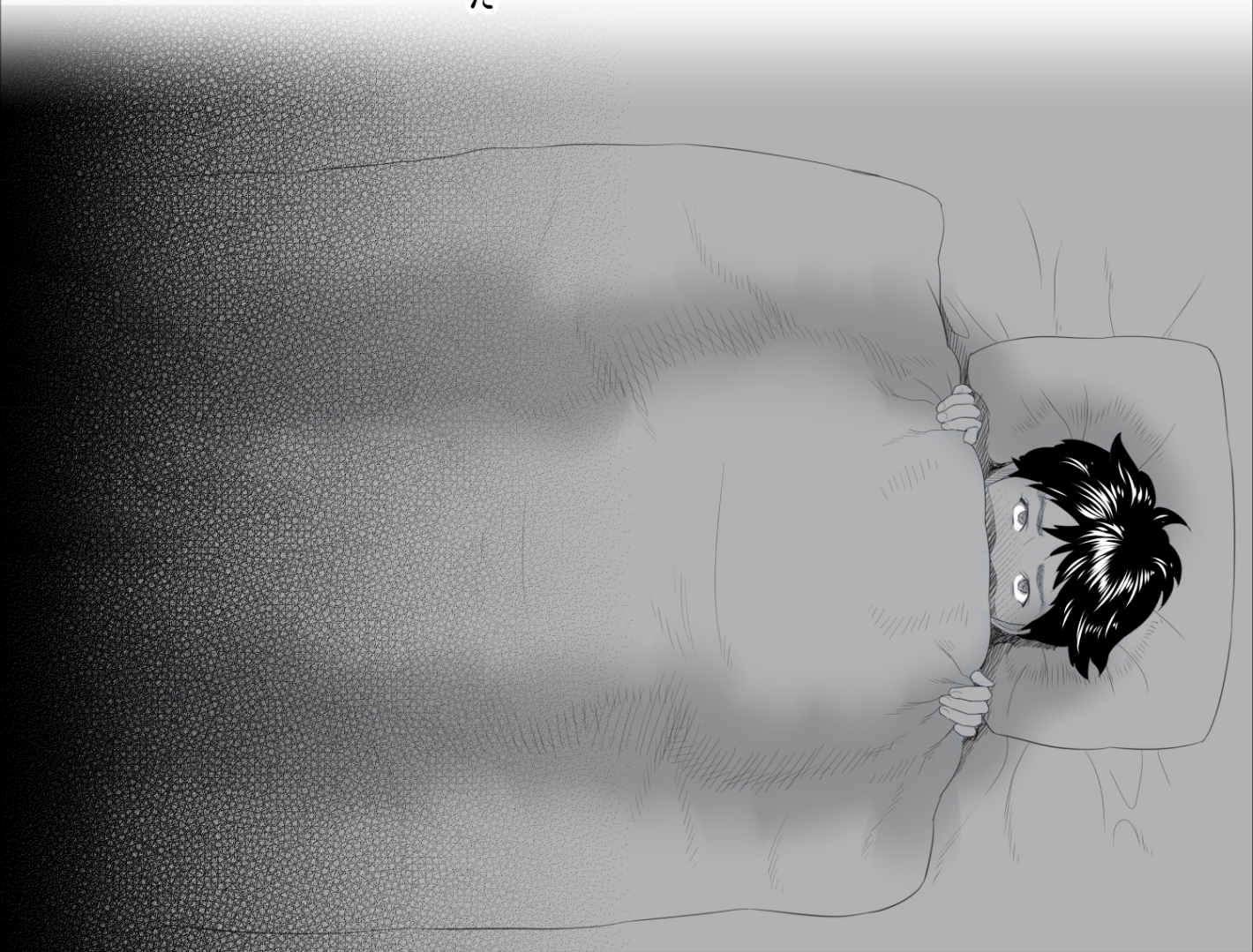
後は待つしかない、、
変に暴走しないようにお母さんの裸でオナネタは充分だから
気を紛らわしながら待とう、、

あーーー　でも今日は寝れそうにないや、、

それからの1週間は気まずかった
お母さんは目も合わせてくれないし、、
隣のウチとは顔も合わせなくなって、、

不安と興奮で寝れなかった
やっぱりダメかも、、親子でなんて、、
でも、どうしても、、、
お母さんの躰を思い出しては何度もオナニーした
毎日　何回も射精した
夢にまで出て夢精もした

その度に想いは強くなっていって、、、



そして一週間が経った

学校から帰ってリビングに行くと
母親がぽつんとソファーに座っていた

夕日が眩しく差し込むせいで
背を向けて座ってる母親の姿が
幻のようにも見えた

今日も無視かな、、
と自分の部屋に行こうとした背中に
母親の声が流れてきた

「、、一度だけ」

「？」

夕日にも目がなれて母親の姿もハッキリ見えてきた
背筋を伸ばして何かの覚悟を決めたように、、

「、、いい？
ただ＜事務的＞に
セックス、、、
するだけよ、、、」

それはデパートのアナウンスみたいに自分に言われてるのかも
分からなかったけど、耳から頭に　そして全身に伝わっていき
体の芯で理解した瞬間　熱い塊に体の末端まで血が湧いたみたいだ！

「勿論　お父さんには絶対秘密、、」

「それで不倫は止めるって
約束しなさい！」

「うん！約束するよ！」

母親は深い溜め息を吐きながら
罪の重さをその身に背負うようにゆっくりと立ち上がった

「、、じゃあ
あんたの部屋に行くわよ」

ガチャ。
ズル
バサ
このゴム着けて
パ
、、早く済ませなさい
ガ

「はーい　着けまーす」
平静を装ってるけど心臓はバクバクだ！
やった！やったよ!!
最初で最高の問題！　思ったより簡単に突破できた！
お母さん　わざと恥じらいもなく股を広げて見せて
事務的にセックスするのを強調してるのバレバレだよ
僕にとっては最高に都合が良いけどねw
母親と向かい合って大股開きしている内ももを
ゆっくり撫でていく、、
「ちょ！ちょっと！
そんなこといいから！サッサと入れて出しちゃいなさい！」
「えー？そんなのセックスじゃないよ？
じっくり愛撫してトロットロになってからじゃないと、、
お父さんとはそういうセックスしてないの？」
「な！生意気に！
わかってるわよ！早く済ませたいだけでしょ!?
す　好きにすればいいじゃない！」
「だよね～　じゃあ僕の好きなだけ愛撫していくよ　お母さん♡」

西日のすっかり消えたリビングは真っ暗に静まり返っていた
、いや　かすかに揺らぎが　震えが伝わる、、
その波は廊下を伝って望の部屋から漏れてくる、、その震源は、

「んぅ！んぅぅぅ　っくんんぅぅん！！！」

必死に顔を腕で隠しながらも喘ぎ声までは完全に抑えきれず
切ない声を漏らし続ける母親からだった

「5回目までは覚えてたけど、、、
何回目だっけイクの？」

母親の股間から顔を上げた望の口元は愛液とよだれでテラテラと輝いていた

「はぁ、、はぁ、、だ　から、、
イッてなんて、、ない、、　わよ、、」

「そーだよねーー
でもすっごい潮吹きやすいんだね　お母さん♡」

「あんた、、なんで、、こんなやり方　しって、、、」

「なんか僕　女の人気持ちよくさせるの好きみたいなんだw」

「、、隣の美喜さんね、、あの人子供になんてことさせてるのよ、、」

「僕がお願いしたんだよ？AVなんかじゃわかんないような
実際に気持ちよくなるやり方　教えてもらったんだ～
お母さんにも応用できて良かった！」

「もう分かったから、
早く入れなさい」

「お母さん入れてほしい？
僕のおちんちん入れてほしいの？」

「そんな事、、
早くすませなさい！」

「そんなんじゃ駄目だよ
またクリ舐めGスポット同時責で潮ふかせちゃうよ？」

「いや！やめて！
もう駄目　早く　終わらせなさい！」

「、、ダメー」

「！」

「「ちんぽ入れて」
って言わなきゃセックスしない」

「、、、っ　い、、、」

「いいから！
おちんちん入れなさい！」

、、、部屋中が緊迫で固まったようだった
が、望はまったく動じてないように
ゆっくり母親の股間から指を抜いた

「、、、そんなんじゃ出来ないよ。」

スッと立ち上がって母親を見下ろす

「今日はこれでオシマイ。」

「え？　ちょちょっと！」

「来週　またしようよ、
セックスするって約束したからね♡
お母さん」

そう言い残して望は部屋を出ていった

「ちょっと！望！、、、」

ふと、冷たくなった股間に気付いて
大股開きを閉じる母親だけが残された

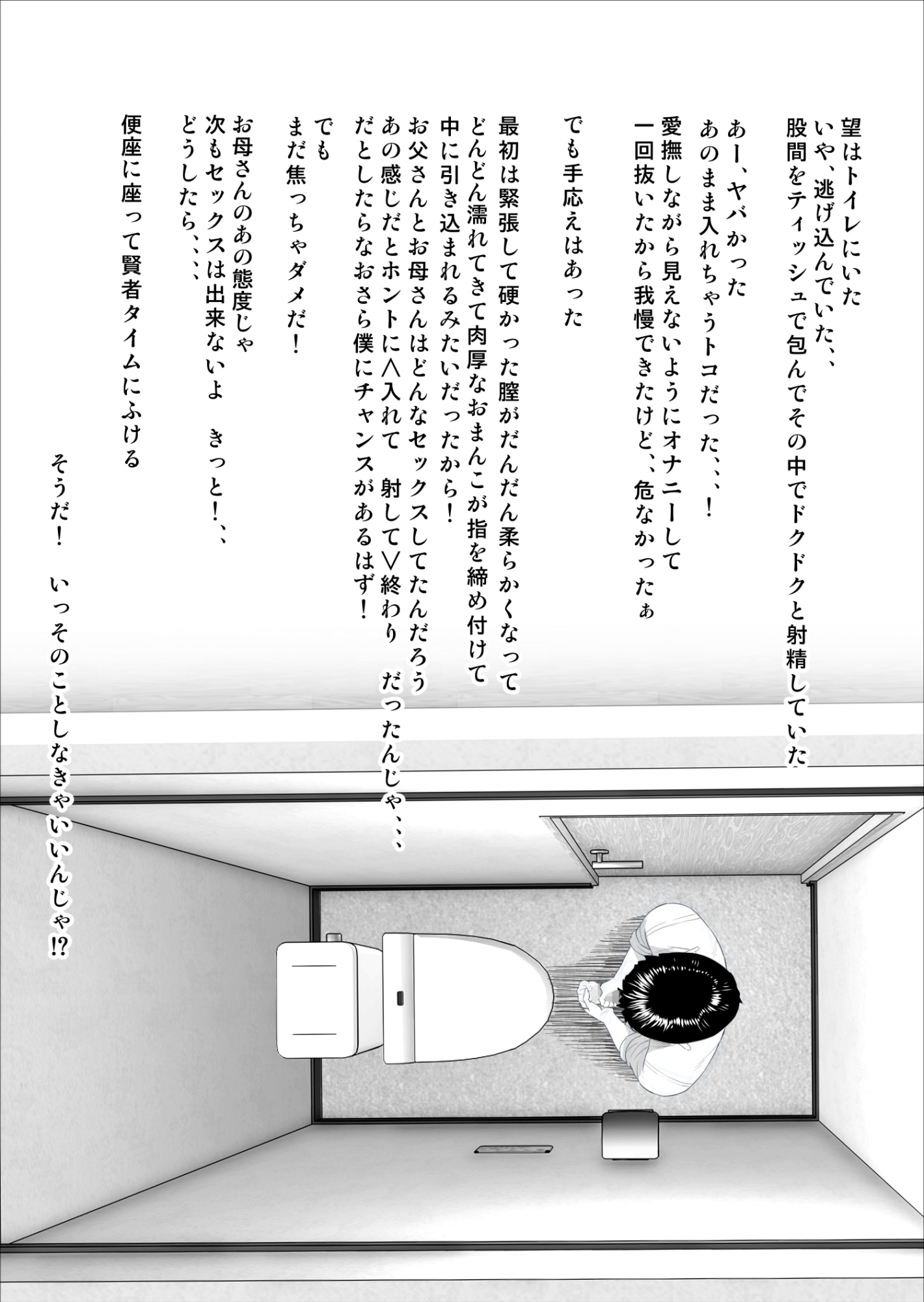
望はトイレにいた
いや、逃げ込んでいた、、
股間をティッシュで包んでその中でドクドクと射精していた、

あー、ヤバかった
あのまま入れちゃうトコだった、、、！
愛撫しながら見えないようにオナニーして
一回抜いたから我慢できたけど、、危なかったぁ

でも手応えはあった

最初は緊張して硬かった膣がだんだん柔らかくなって
どんどん濡れてきて肉厚なおまんこが指を締め付けて
中に引き込まれるみたいだったから！
お父さんとお母さんはどんなセックスしてたんだろう
あの感じだとホントに＼入れて　射して／終わり　だったんじゃ、、、
だとしたらなおさら僕にチャンスがあるはず！
でも
まだ焦っちゃダメだ！
お母さんのあの態度じゃ
次もセックスは出来ないよ　きっと！、、
どうしたら、、、
便座に座って賢者タイムにふける

そうだ！　いっそのことしなきゃいいんじゃ!?



翌朝も母親の見送りの姿はなかった
「そりゃそうだよねー」

そして居心地の悪い空気感のまま
一週間が過ぎた、、

また望の部屋のベッドの上で
息子に執拗に愛撫されるのを声を押し殺して耐えている母親がいた
、、、耐えれてはいないが、、、

「まだイクの三回目だけど汁の量が前より断然に多いよ？
気持ちよさもアップしてるんじゃない？お母さん？」

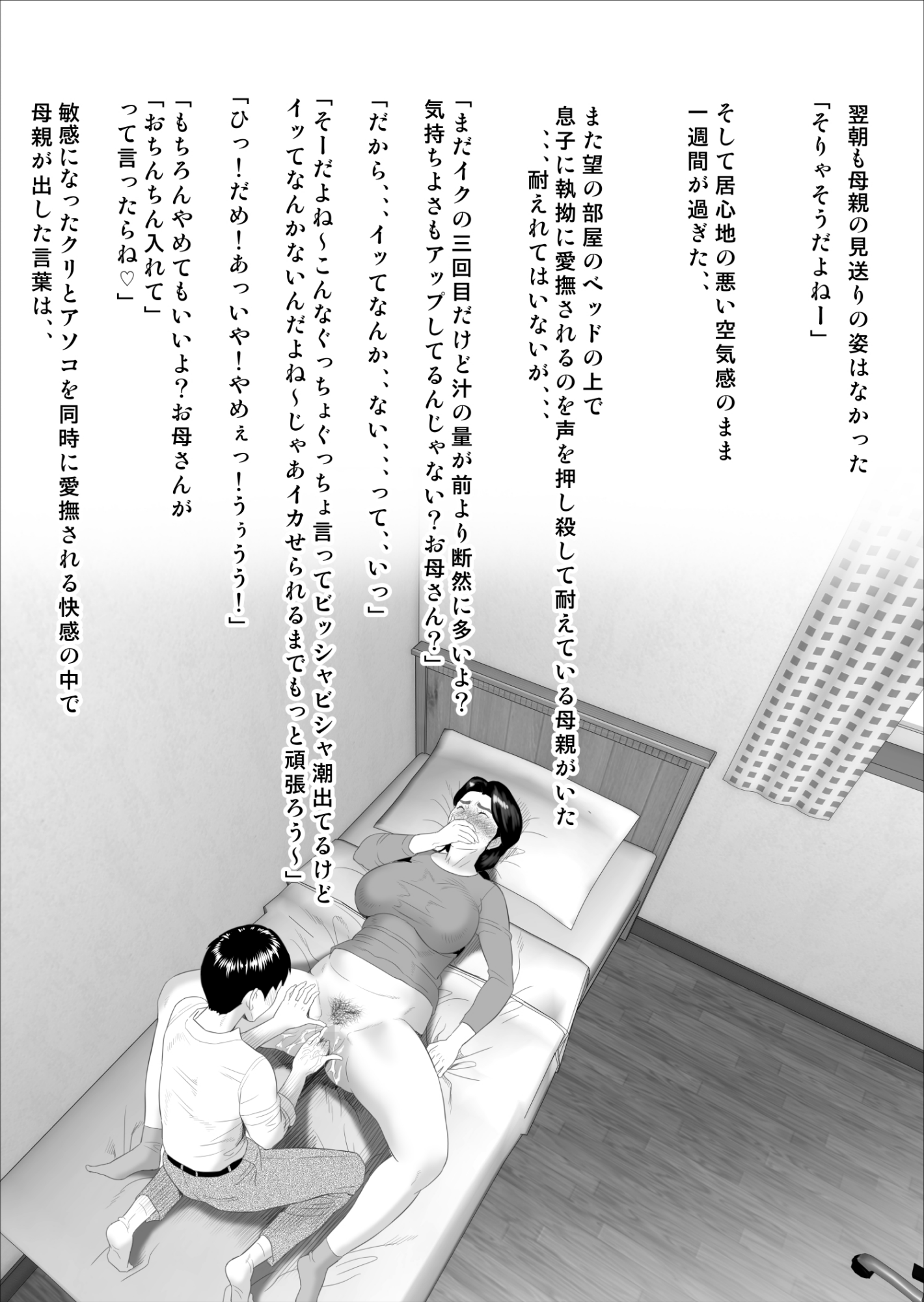
「だから、、、イッてなんか、、ない、、、って、、いっ」

「そーだよね～こんなぐっちょぐっちょ言ってビッシャビシャ潮出てるけど
イッてなんかないんだよね～じゃあイカせられるまでもっと頑張ろう～」

「ひっ！だめ！あっいや！やめぇっ！うぅうう！」

「もちろんやめてもいいよ？お母さんが
「おちんちん入れて」
って言ったらね♡」

敏感になったクリとアソコを同時に愛撫される快感の中で
母親が出した言葉は、、



はあ
はあ
はー
はっ
はあ
はあ
はー…
はー!
望、、、
ヒクッ
ヒクッ

そんなに僕とセックスしたくないんだ、、
ハァ
ハァ
じゃあ

交換条件!

セックス以外で僕を10回イカせたら

セックス1回分したってことにしてあげる

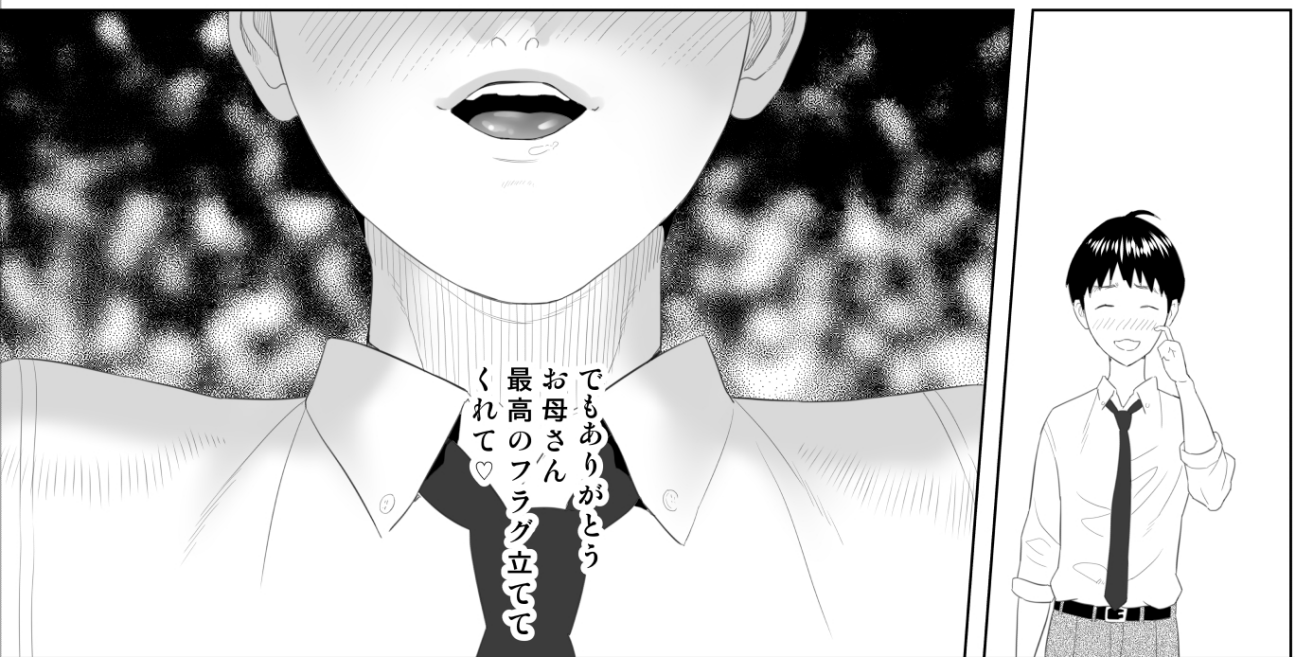
!!

「セックス、、以外!?」
「いろいろあるでしょ？
フェラチオとかパイズリ　手コキ
素股　尻コキ　シックスナインとかとか、、
知ってるくせに～」
「わ！わかってるわよ！
、、それで望を１０回イかせれば
セックスはしないでいいのね？」
その反応を見て望の憶測は確信になった
「うん！約束する」
「、、まあ
お母さんがしたくなったら
話は別だけど、、」
「そんなこと！
あるわけないでしょ!?」
ホッとしたのか母親は勢いよく後ろに
身を投げて倒れ込んだ
それを見下ろす望

その交換条件のったわ！

ふぇらなんとかとかぱいなんちゃらでもセックス以外ならなんでも！さあ　好きにしなさいよ！

10回ちゃんと数えるからね！



奥付

「近女誘惑
僕がお母さんとこんなことになっちゃう話 序章」

発行日：　2022年5月01日

発行者：　灰司

E-mail：　hyjihyji@gmail.com

禁止事項

本のコンテンツ(テキスト＆画像 表紙のものも含む)の無断複写･無断複製･無断改変

本のコンテンツ(テキスト＆画像 表紙のものも含む)の写真･複写の
インターネット上へのアップロード(Twitter等を含む)

PROHIBITIONS

●Unauthorized copying,
reproduction and modification of the contents
(texts & images including those on the cover) of this book

●Uploading of the photographs and copies of the contents
(texts & images □ including those on the cover) of this book to the Internet
(You also cannot post them on Twitter)

© hyji 2022